

『官許佛和辞典』と岡田好樹をめぐって

Outline of *Nouveau dictionnaire français-japonais*  
(Kankyo Futsuwa Jiten and Yoshiki Okada)

名古屋大学附属図書館  
Library, Nagoya University

中井 えり子  
NAKAI, Eriko

Abstract

YOSHIKI Okada, a translator and an editor, published *Nouveau dictionnaire français-japonais* (Kankyo Futsuwa Jiten) in 1871. He had been an English teacher in Nagasaki from 1865 to 1871 before moving to Tokyo in 1871.

In this paper we reveal the personal history of YOSHIKI Okada, introduced the bibliographical description of the dictionary and tried to evaluate *Nouveau dictionnaire français-japonais*

Keywords: *Nouveau dictionnaire français-japonais* (官許佛和辞典), OKADA, Yoshiki (岡田好樹)  
Verbeck, Guido Fridolin (フルベッキ), English study in Nagasaki at the end of Edo Period (幕末長崎の英学)

1. はじめに — 調査・研究の経過 —

日本で最初の活字版でしかも洋装版による『官許佛和辞典』(1871)を出版した岡田好樹(嘉永元年3月17日—大正15年2月10日)に、なぜ関心を寄せるようになったのか。そのいきさつは次のとおりである。名古屋大学附属図書館所蔵の『官許佛和辞典』(写真1)は、かつて神宮皇學館大学の所蔵本で、同大学は1946年に廃校になり、その所蔵本が1947年度に名古屋帝国大学に保管転換されたが<sup>1)</sup>、その中の一冊である。発端は、この『官許佛和辞典』の目録作成に際して記者の「好樹堂」が何であるかを調べる必要があったからである。苦勞の末、好樹堂が岡田好樹である

ことを突きとめたことを、当時目録担当の一人であった島岡眞が「好樹堂訳『官許佛和辞典』の目録から」<sup>2)</sup>で書いている。筆者は島岡の当初の調査にかかわった一人であるが、この記事が書かれた1975年時点では、『辞書風物詩』<sup>3)</sup>から、『官許佛和辞典』が活版で印刷された最初の仏和辞典であることと、『長崎洋学史』<sup>4)</sup>から長崎の済美館で岡田誠一(後好樹)が英語を教えていたという事実を知りえたが、結局岡田好樹という人物の詳細は判明しなかった。

1963年に長崎の郷土史家、渡辺庫輔(1901—1963)は、『長崎新聞』連載の「長崎町づくし」178(4月5日付け)で、「柴田<sup>5)</sup>は英和辞書をつ



写真1 名古屋大学附属図書館所蔵『官許佛和辞典』

くり、岡田は仏和辞書をつくった。柴田については時々書いている人もあるが、岡田のことはどうして言わないのだろうか。」と言っている。その後約40年近くたった2002年刊行の『辞書遊歩：長崎で辞書を読む』でも、松藤英恵は、「彼の経歴に関して記した文献もまた極めて少ないと言えよう。」と言っている<sup>6)</sup>。

1975年以降、折りに触れ関心を寄せ続け、内外の活字になっている図書、雑誌論文、および文書から、彼の著作（訳書）や経歴がある程度明らかになったが、生没年すら特定できなかった。その大きな転換は、『日獨言語文化交流史大年表』<sup>7)</sup>に、岡田峻（おかだ たかし、1904-1966。元中央大学教授、スペイン語専攻）の談話として、『官許佛和辞典』の訳者岡田好樹が明治初期に上海に渡り、自ら組版までも手伝って出版したという注があり、岡田峻と岡田好樹が孫と祖父の関係であるという事実を発見したことにある。これをきっかけに東京在住の岡田好樹のご子孫の方に会うことができたのが1994年であった。

東京都内の岡田家を訪ねた時に、岡田家の系図、好樹のロンドンで撮影された写真、そして彼の肖像画、さらに岡田峻が祖父好樹から聞いた話に言及している彼の著作に巡り会うことができた。また岡田峻が作成した岡田家の系図によって好樹の生没年が判明した。

本稿では、このような経過によって判明した岡

田好樹に関わる今までに発表されていない諸々のことを記すことによって、岡田好樹がどのように英語を習得し、幕末・明治の初年にそのような語学力を身につけた人物がどのような人生を歩んだかをたどってみる。『官許佛和辞典』については、その書誌的な事柄を述べるとともに明治期に印刷された仏和辞典との比較によって評価を試みる。

1995年頃から学術情報センター（現在の国立情報学研究所）のNACSIS-CATへの遡及入力急速に進むにつれて、『官許佛和辞典』の所蔵機関の存在が明らかになった。それぞれの印記等を調査することによって、『官許佛和辞典』がどのように販売され、所蔵されたかが伺い知れるようになったが、その詳細は紙面の関係もあり、別の機会に述べる。

なお、本稿では文中に特に断り書きがない場合、太陽暦が採用される明治5年12月3日までについて、元号で記述しているものは旧暦であり、西暦で記述してあるものは太陽暦である。また、書名や引用箇所の日号や文字はオリジナルのままとした。

## 2. 岡田好樹の履歴

この節では、公文書や出版物等から得たデータをもとに岡田の長崎時代から晩年までを時系列で列挙する。

## (1) 長崎時代

関係文書<sup>8)</sup>や岡田家の家系図等により、判明している長崎時代の岡田好樹の履歴は表1のとおりである。なお、岡田家に残る記録等より、岡田好樹には、仁三郎(幼名)、誠一、凌雲の別名があることがわかっている。また、岡田家の墓地は、かつて長崎市寺町の深崇寺(浄土真宗本願寺派)にあり、墓地を写生したものが岡田家に残っているが、筆者が1995年に訪れ、住職にも確認したが見つけることはできなかった。前述の岡田好樹の孫、岡田峻が作成した家系図もあり、後の調査で岡田好樹の妻うらは、長崎出身で日本橋の翁堂菓子舗に隠居していた下田喜平の娘で、うらの異母兄弟に画家の曾宮一念(そみや いちねん、1893-1994)がいることがわかっているが<sup>9)</sup>、その関連資料からは長崎での岡田好樹の経歴を引き出すことができなかった。

以上であるが、好樹の生誕地も不明であるし、いつまで長崎にいたかも正確にはわからない。校訂明治官員録(明治4年10月5日改め)に文部省編輯寮九等出仕とあり、編輯寮は1871(明治4)年9月に設置されているので、1871年4月頃から8月頃には長崎を去っていると推測される。上記のリストの内容について順次説明する。

何礼之(が れいし、1840-1923)は、長崎で唐通事の家生まれ、英語所や洋学所で学頭を勤め、済美館で英語を教える。岩倉使節団に一等書記官として随行し、帰国後は内務省、元老院議官等を

経て、1891年12月に貴族院議員になり、1923年に没する。

英語の必要から長崎奉行所は安政4(1857)年8月に英語学習者を増員するに際し、通事・通詞のみでなく一般市民にも対象を広げた。翌安政5年(1858)に英語伝習所を設置し、文久2(1862)年には改名して英語所もしくは英語稽古所とした。何礼之の「公私日録」の文久3(1863)年10月に直試を受けた生徒の名簿に岡田誠一の名前があることから、長崎の英語所で何礼之から英語を学んだらしいということがわかる。文久4(1864)年に、何礼之は自宅に塾を開いているので、そこでも学んだ可能性がある。長崎奉行所は文久3年12月には江戸町に仮語学所を設置して英語所を洋学所と改称する。元治元(1864)年に洋学所は語学所とする。さらに翌慶応元年には新町に移って済美館と改称し、フルベッキ、何礼之(当時礼之助)、柴田昌吉(当時大介)を中心として、岡田好樹(当時誠一)らが英語を教えるようになった。このときの学頭は、何礼之と平井義十郎(後希昌、1839-1896)であり、英語教師のうち、玉名純之助(順之助)、嶋田種次郎(島田胤則)、西三保太郎らは、岡田好樹と一緒に直試を受けていた生徒たちである。この済美館は明治元年には官学の「広運館」となり、明治3年には大学校の所轄となるなど、複雑な変遷をたどるが、現在の長崎市立長崎商業高等学校の前身である。

フルベッキ(Verbeck, Guido Herman Fridolin,

(表1) 長崎時代の年譜

元号(西暦)	事 項
嘉永元年(1848)	3月17日 岡田耕耘と峯の次男として誕生
文久3年(1863)	10月5日 何礼之の「公私日録」に英学所で直試の受験者の一人として掲載
元治元年(1864)～慶応3(1867)の間	フルベッキと塾生と思われる人々と一緒に写真撮影(写真3)
慶応元年(1865)	古賀二郎著『長崎洋学史』上巻(長崎学会編 長崎文献社1966) p.200に済美館で英語を教えた一人として岡田誠一(好樹)の名で掲載
慶応4年(1868)	越中哲也「長崎と英語」で慶応4年4月改分限帳に「済美館英語局教授 岡田誠一」と記載 「分限帳(戊辰六月改)」に「済美館英学局教授 岡田誠一」と記載
明治元年(1868)	『明治元年版長崎府職員録』に「広運館英学局教授 岡田誠一」と記載
明治2年頃	「フルベッキ氏東京へ出発ノ時」と題する写真に「岡田好樹(医師)」として写る(写真2)
明治3年(1870)	『改正長崎職員録』に「広運館 英語教導 岡田凌雲」と記載 上海で『官許佛和辞典』の組版を手伝う
明治4年(1871)	[正月]『官許佛和辞典』出版。仏語の自序は“Changhai, Février, 1871” 3月12日「広運館医学校生徒入門書類雑書(雑肋)」に「宿所出来大工町 広運館英学教導 岡田凌雲」と記載



1830-1898)はオランダ生まれの米国長老教会の宣教師で、お雇い外国人として明治2年に開成所に招聘されるまで、長崎の済美館や広運館等で、英語やドイツ語を教えた。長崎歴史文化博物館所蔵の「フルベッキ氏東京へ出発ノ時」と題する写真(写真2)は、上野彦馬撮影のもので、焼き増しされたものが何枚か現存していると考えられる。この写真にはフルベッキを含めて全部で24名が写っており、いくつかの出版物に転載されている。筆者が現物を確認したのは、長崎歴史文化博物館所蔵の写真と岡田家所蔵の写真である。その他には『長崎フランス物語』<sup>10)</sup>と『長崎縣人物傳』<sup>11)</sup>に掲載されたものがあるが、いずれも写真の所蔵者名は記述されていない。氏名のほかに肩書きや住所が記述されているのは長崎歴史文化博物館所蔵と『長崎フランス物語』のみである。歴史文化博物館所蔵写真は1928(昭和3)年に加藤某氏から長崎図書館に寄贈されているが、1992年に同館を訪問して長崎図書館の司書の方に伺ったが、加藤氏の素性や寄贈のいきさつはわかっていないとのことであった。

『長崎フランス物語』では、写真の説明書きに『米人フルベッキ先生送別記念写真 明治二年長崎府広運館ニテ 仏語科生徒一同写真』とある。長崎歴史文化博物館の写真には「慶應元年八月長崎府新町ニ済美館ヲ設立シ後廣運館ト改称ス 明治初年同館担任フルベッキ氏東京へ出発ノ時重ナル

門人記念トシテ新大工町上野彦馬寫真館ニ於テ撮影セリ」と右書きの説明書きのある人名を書いた用紙が付いている。博物館のオンライン目録では、撮影時期は「～1868年」とあるが、フルベッキに公式に東京へ招聘依頼があったのが1869年2月16日であり<sup>12)</sup>、これは旧暦では明治2年1月6日であるので、写真撮影の意図からすれば、上野一郎氏の解説<sup>13)</sup>にもあるように明治2年の撮影であろう。フルベッキは上京することになるであろうことを、1868年12月19日(旧暦明治元年11月6日)付けのフェリス宛の手紙に書いている<sup>14)</sup>が、写真撮影は公式の通達以降であると考えられるからである。『写真の開祖上野彦馬：写真にみる幕末・明治』の写真は、出版当時長崎県立図書館所蔵(現在は長崎歴史文化博物館所蔵)であり、印刷ミスか、本文写真のキャプションが欠落している<sup>15)</sup>。

ちなみに長崎歴史文化博物館蔵の写真の説明書き、岡田家の写真、『長崎フランス物語』、及び高橋信一の「フルベッキ写真」に関する調査結果<sup>16)</sup>を総合すると、一緒に写っている人々は以下のとおりである。( )内は人物の肩書き等で、山本松次郎については『長崎フランス物語』p.77から、その他は長崎歴史文化博物館の写真の説明書きに記載されているとおり記述した。岡田家の写真のメモ書には、山本松次郎は武内萬松、岡田好樹は岡田仁三郎(好樹)、島田胤則は島田種次郎、



写真2 長崎歴史文化博物館蔵「フルベッキ氏東京へ出発ノ時」と題する写真  
中央フルベッキの右隣が岡田好樹

林省三は林甚八と記述されるなど、他の2つと異なる部分が多く、より古い名前で記されていると考えられる。

最上段：徳見常人 池田寛治（明治十二年三月六日長崎税関長） 玉名貞久（元佐賀屋敷用達） 名村泰蔵（元大審院長心得） 矢野隆平 富田淳久 野間忠次郎 田辺順之助 藤岡 上野彦馬 松岡恕平 服部邦彦 不明

中段：山本松次郎（仏語訓導） 松田雅典（長崎缶詰元祖） フルベッキ 岡田好樹（医師） 島田胤則（袋町）

最下段：三浦亀五郎（裏興善町） 高木碩二郎（高見松太郎氏ノ親父 五島町 現今服山氏宅） 松尾幸太郎（紙屋町 何教頭学僕） 野田 林省三（東中町） 不明

最上段の上野彦馬の名は、高橋信一によるもので、他の写真と比べた結果この写真を撮影した上野彦馬と思われるとしている。その他の人物のうち、日本における缶詰業の始祖とされる松田雅典（1832-1895）や、名村泰蔵（1840-1907）、山本松次郎（1845-1902）は『日本人名大辞典』（講談社 2001）にも掲載されており、池田寛治、名村泰蔵、山本松次郎は、初版が1919年に発行された『長崎縣人物傳』に掲載されている。語学や行

政などの分野で活躍した人々である。富田仁の『長崎フランス物語』の写真の説明書に「仏語科生徒一同写真」とあるがその根拠が明確でなく、前述したように、玉名や島田は、岡田と一緒に英学所で直試を受けており、済美館の英語の教師であったので、この写真は、写真2の説明書きに書かれているように「フルベッキの重なる門人」が写っているものと判断する。1869年前後の長崎の職員録等から、英語教師であったのは、矢野隆平、田辺順之助、岡田好樹、島田胤則、松尾幸太郎、フランス語は名村泰蔵、松岡恕平、山本松次郎である。名前の確定できない藤岡は、名が友作あるいは雄之助であれば英語、野田が米十郎であればフランス語の教師であったことになる。池田寛治は、明治4年の岩倉使節団に随行し、『長崎縣人物傳』によると、フランス語に精通していたとある<sup>17)</sup>。

この写真と同じ人物が写っていて構図もほぼ同じであるが、明らかに同一でないと思われる写真が『開かれた窓：写真誕生の170年：東京富士美術館コレクション』に掲載されている<sup>18)</sup>。同一人物の表情が異なったり、わずかに位置が違っているからである。この写真には写っている人々の説明はない。単に「ヨーロッパの先生と生徒達 長崎 1869年」とあるのみである。

実は、上野彦馬が撮影した岡田好樹の写真がもう一枚わかっている（写真3）。後藤和雄、松本



写真3 「フルベッキと塾生の写真」（『読者所蔵「古い写真」館』朝日新聞社 1986 p.47より転載）中段右端が岡田好樹



逸也、早坂元興編『読者所蔵「古い写真」館：幕末から昭和へ』（朝日新聞社 1986 p.47）、及び松本逸也著『幕末漂流』（人間と歴史社 1993 p.50）に掲載されている。「フルベッキと塾生の写真」と題されるもので、武藤長蔵（むとう ちょうぞう、1881-1942。経済学博士）の蔵書である武藤文庫（長崎大学経済学部）にも同じと思われる写真があり、フルベッキを含めて16名が写っている。武藤の自筆とされる説明書によると、フルベッキの他、岡田好樹（中段右端）、玉名順之助（最上段右端 写真2の玉名貞久と同一人物と思われる）、伊藤仁平（中段左から3番目）、柴田昌吉（中段左から2番目）、島田胤則（最下段左端）の名前が分かっている。撮影の時期は、高橋信一の「フルベッキ写真に関する調査結果」<sup>19)</sup>では、フルベッキが語学所で英語を教え始めた元治年間とし、柴田が慶応3年3月江戸の海軍伝習所の通詞として出仕しているの、明治以降の撮影とは考えられないと記述している。柴田の出仕については『柴田昌吉傳』で慶応3年3月12日に外国方御用として出府と書かれており<sup>20)</sup>、またフルベッキについては、元治元年6月16日付けの長崎奉行から、米国コンシユルに宛てた手紙で、フルベッキに語学所の英語教授を依頼している<sup>21)</sup>ので、写真の撮影時期は元治元年6月以降、慶応3年3月以前としておく。武藤文庫の写真については長崎の「せつ写真館」で複製されたもので、オリジナルの所在は不明である。また、この写真と一緒に写っている人々と岡田好樹との関係を示す文献はみつからない。

前述した好樹の孫の岡田峻は、その著『明日へのエスパニア語』（三省堂 1942）の「序にかへて」（p.8）で、祖父好樹が「19歳の時好学の心に燃え外車船に乗じて曾祖父の激励と援助の下に外遊した」と記している。好樹19才というと慶応3年であり、慶応2年4月に留学のための渡航が正式に認められたとはいえ、外国へ行くことは困難と思われ、その他の文献でもこの事実は確認できていない。

このようなわけで、好樹は英語の教師であったということがわかるが、なぜ『官許佛和辞典』を出版することになったのか。また、長崎歴史文化博物館所蔵のフルベッキとの写真の説明に「医師」とあるのも事実が確認できていない。

「はじめに」で述べたように『官許佛和辞典』は岡田が長崎時代に翻訳・出版したものである。田中梅吉は好樹令孫である岡田峻との談話として「明治初期(?)に上海に渡り、自ら組版までも手伝って、出版にまで漕ぎつけたと聞いている」と『日獨言語文化交流史大年表』で紹介し、岡田峻は『明日へのエスパニア語』で、「明治初年に24歳の祖父が只辞典の編輯と印刷の為め上海に三ヶ年滞在し、アメリカのプレスビテリアン・ミッション印刷所(Imprimerie de la Mission Presbytérienne Américaine)の活字を以て自ら版を組んでは校正した」と述べている<sup>22)</sup>。上海に3年いたことの確証はないが、岡田好樹が大隈重信に宛てた11月9日付け書翰<sup>23)</sup>から、上海美華書館に明治3年11月頃にいたらしいことはわかる。これには年は書かれていないが、明治3年6月と7月に書かれた書翰も残っており、『官許佛和辞典』の出版の恩典を懇願しているからである<sup>24)</sup>。もう一点、岡田好樹が上海にいたことを証拠づける事実として、惣郷正明が『官許佛和辞典』の訳語のつけ方について興味深い事実を紹介しているので、「日本仏学史上の地位」のところで述べる。

岡田好樹が長崎のどこに住んでいたかは、明治4年の「廣運館医学校生徒入門書類」（長崎歴史文化博物館所蔵）の記載では、宿所として出来大工町となっているが、前述した渡辺庫輔の「長崎町づくし」177（『長崎新聞』1963年4月4日付け）には、「岡田好樹は馬町の人であり、その家は西山にまがったところ、村上病院の裏手にあたるあたりにあった」と書かれている。

## （2）外務省時代

前項で述べたように、明治4年10月の官員録には「文部省編輯寮 九等出仕」<sup>25)</sup>とあり、外務省に勤務する前のわずかの期間文部省に在籍している。編輯寮は、明治4年9月に文部省の外局として設置され、教科書の翻訳編輯を行っていた。このことからおそらく岡田好樹は編輯寮が設置された9月に着任していたのではないかと推測される。

早くも翌明治5年4月に外務少記として、寺島大弁務使の随行を命じられ<sup>26)</sup>、同年5月17日には、特命全権公使寺島宗則に随行して英国へ出発した<sup>27)</sup>。6月17日にワシントンに到着し、26日に英国へ出航して、7月8日にロンドンに到着す

る<sup>28)</sup>。寺島は、翌9日にはワイト島でヴィクトリア女王に謁見する。前述の岡田峻の『明日へのエスパニア語』では、「大禮服をとゝのへ Queen Victoria に謁を賜はつた最初の日本の外交官だった」と記されている<sup>29)</sup>が、岡田も一緒に謁見したかどうかは不明である。その後寺島は9月に、日本が初めて英国に設けた公使館となる弁務使館を設置している。翌明治6年1月の岡田の身分は外務省三等書記官である<sup>30)</sup>。8月に、岡田は訳書『經濟之理』の序で「本朝始テ英国ニ公使館ヲ置キ寺島全權公使ヲ派遣ス予書記ヲ以テ随行シ（後略）」と自ら寺島宗則に書記官として随行したことを述べている。さらに「日米里堅人嘉禮氏編述する所の經濟全書を読むに至り、其理妥當、其論明確にして、予が宿夙思想せし所と其趣旨全く相符号す」とも言い、岡田が經濟書を原書で読んでいたことがわかる。この翻訳書は翌1874年6月に岡田が内務省に移ってから出版された。書誌事項については、3. 岡田好樹の著作の節に記す。また、成島柳北（1837-1884）は明治5年9月に東本願寺法主の大谷光瑩（現如）の欧州視察に随行しているが、1873年4月27日にロンドンに到着し、翌日の28日に岡田に公使館で会っている<sup>31)</sup>。柳北は5月20日にロンドンを去るまでに

3回公使館を訪問して、森公使（代理）や寺島に会いに行っているの、そのときにも顔ぐらひは合せている可能性がある。その後同年9月に岡田は父耕耘が病没したため英国を立ち、11月には帰朝届を提出している<sup>32)</sup>。岡田好樹は1年2ヶ月ほど英国に滞在したことになる。帰国当時の官職は明治6（1873）年の『勅奏官一覽表』<sup>33)</sup>によると、三等書記官正七位である。翌1874年3月に母の峯が没する。外務省七等出仕岡田好樹として忌服并除服届が出ているので、3月までは外務省に勤務していたことになる。

結婚の時期は不明である。岡田家に残る家系図を見ると、長男の数馬の生年月日は不明であるが、明治21年7月に16才で没していること、また数馬が生まれる前に長女ノブが生まれているらしいことがわかっている。ノブの生没年は不明であるが、これらのことから推測すると明治3年か4年にうらと結婚したのではないかと推測される。

### （3）内務省時代

『掌中官員録』『官員録』『内務省職員録』『明治官員録』『改正官員録』<sup>34)</sup>及び岡田家に残る家系図等から表2のことがわかっている。岡田好樹が校閲・翻訳した書物の書誌については、3. 岡田

（表2）内務省時代の年譜

明治7（1874）	内務省七等出仕正七位（『掌中官員録 明治7年10月』） 『經濟之理』翻訳出版
8（1875）	内務省少丞六等出仕正七位（『勅奏官職員録 明治8年3月改正』） 『斯氏農書』翻訳刊行開始
9（1876）	内務省少丞六等出仕正七位（『内務省職員録 明治9年7月5日改正』） 『甜菜砂糖製造法』校閲刊行 三男、秀（ひいず）誕生
10（1877）	内務省図書局御用掛准奏従六位（『官員録 明治10年6月』）
11（1878）	内務省図書局少書記官従六位（『内務省職員録 明治11年5月29日改正』）
12（1879）	内務省図書局少書記官従六位（『明治官員録 全 明治12年2月6日出版』） 以後、『改正官員録 明治16年4月』まで同じ官職 『英国農書篇』翻訳
14（1881）	独逸学協会 <sup>35)</sup> 設立時（9月18日）に同協会の榮譽会員となる
15（1882）	勲六等単光旭日章叙勲（12月19日） <sup>36)</sup> 『箱根草』5集（明治15年1月発行）に漢詩を発表
16（1883）	内務省図書局権大書記官、従六位勲六等（『改正官員録 明治16年5月』） 内務省図書局権大書記官、正六位勲六等（『内務省職員録 明治11年5月2日改正』）
17（1884）	内務省図書局権大書記官、太政官御用掛兼勲正六位勲六等（『内務省職員録 明治17年7月13日改正』）
18（1885）	内務省第二部長 権大書記官、兼太政官御用掛正六位勲六等（『内務省職員録 明治18年9月1日改正』）
19（1886）	内務省非職 奏任官 元権大書記官 正六位勲六等（『内務省職員録 明治19年6月15日改正』） 『斯氏農書』訂正版 翻訳

好樹の著作の節で述べる。

内務省時代の岡田好樹の公的な生活については、翻訳に携わったこと以外はわかっていない。この翻訳事業について言えば、1886年の『斯氏農書』訂正版を除いて、1879年で終わっている。1881年を境とした日本の殖産興業政策の転換によるものであろう。いわゆる「明治14年の政変」と関係の深い国策上設立された独逸学協会に岡田好樹が名誉会員になっており、当時一緒に内務省図書局に在職していた何礼之は会員になっていない。大半が官吏か地方公務員が会員であるこの政治色の強い独逸学協会への岡田の入会のいきさつについても、手がかりとなる資料がない。

#### (4) 退官～晩年

内閣官制が1885(明治18)年に太政官達第69号によって定められ、太政大臣・左右大臣・参議及び各省卿の職制が廃止されたが、岡田好樹は、その翌年内務省非職となっている。この年、岡田はまだ38才である。その後の岡田についてはほとんどわかっていない。『日本紳士録』には、1889(明治22)年の第1版から1899(明治32)年の第6版までと、1909年(明治42)年第14版から1911(明治44)年第16版までに掲載されており、前者には住所が、後者には住所と所得税額が記されている。ただし、前者では「麹町区富士見町」であるのに対し、後者では住所が「下谷区池ノ端茅町」となっている。その後『日本紳士録』には掲載されていないが、1912(明治45)年発行の『東京市衆議院議員選挙人名簿』には、元の麹町の住所になっている。

1898(明治31)年3月には、お雇い外国人のフルベッキが没し、9月に作られた「故フルベッキ先生紀年金募集主意書」の発起人39名の一人として名を連ねている<sup>37)</sup>。

岡田峻は『明日へのエスパニア語』で「其後大學南校に英語を教授したりして35歳で隠退し79歳に歿する迄漢詩をつくつては自適してゐた(後略)」<sup>38)</sup>と言っているが、官員録等では、大學南校で教師をした事実は見あたらない。また、35歳で隠退しとあるが、少なくとも1885(明治18)年の37歳までは、官員録に掲載されている。1882(明治15)年に漢詩を投稿していることから(次節 著作一覧⑦参照)、漢詩を作っていた

ことは確かであろう。

また、国立公文書館のデジタルアーカイブシステム(<http://www.digital.archives.go.jp/>)で「岡田好樹」を検索キーとして検索すると1901(明治34)年06月10日の日付で「大阪府立中之嶋高等女学校教諭岡田好樹以下四名任命ノ件」の文書、及び1904(明治37)年10月31日付けで「大阪府立堂島高等女学校教諭岡田好樹以下二名休職ノ件」の文書がある。この岡田好樹が本稿の岡田好樹と同一人物であるかどうか確証はないが、ちょうどこの期間、『日本紳士録』の東京の部から岡田好樹の記載がなくなっており、「名古屋、京都、大阪、神戸等」の部に掲載されているので同一人物である可能性が高い。1911(明治44)年の『日本紳士録』に「教師」と記載されていることと、大阪には何礼之がいたことがあるので、赴任していた可能性はあろう。なお、中之嶋高等女学校と堂島高等女学校は、現在の大阪府立大手前高等学校の前身である。

このほか、岡田好樹が談話者として掲載されている文献が2点ある。『長崎市史 風俗編』<sup>39)</sup>と古賀十二郎(1878-1954)著『徳川時代に於ける長崎の英語研究』<sup>40)</sup>である。これらはいずれも岡田の没後に出版されたもので、いつ談話が行われたかは記述されていない。

また、前述した曾宮一念が永見徳太郎(長崎の画家 1890-1950?)に宛てた1943年9月15日付けの書簡で、曾宮の異母兄弟である「うら」が、岡田好樹と結婚したことに続いて、岡田好樹についての簡単な紹介の後、「非常にヤカマシ屋であった」と書いている<sup>41)</sup>。曾宮の誕生が1893年で、そのとき岡田好樹は既に45歳であるので、曾宮が知っている岡田は、ある程度高齢になってからのことと推測できる。

### 3. 岡田好樹の著作

次項で述べる『官許佛和辞典』以外で、現時点で判明している岡田の著作や翻訳を示す。これらは⑦を除いて翻訳書であり、明治政府の殖産政策として、公務で翻訳した著作物といえるが、ここでは、一覧としての書誌の紹介にとどめ、各著作の内容等についての詳細は別稿に譲りたいと思う。



#### 【著作一覧】(刊行年代順)

①～③は、国立国会図書館近代デジタルライブラリー (<http://kindai.ndl.go.jp/BIBibDetail.php> 2007.5.11 参照) に本文が掲載されている。

- ①ケアリー (Carey, Henry Charles, 1793-1879) 著 『経済之理』岡田好樹譯. 1874.6 (明治7) 有果齋藏版. 22cm. 和33, 26丁 (合本) 原書 "Principles of political economy." の部分訳。
- ②ウエルソン (Wilson, John, 1810-) 著 『英國農業篇』11巻 岡田好樹譯; 長川新吾校; 卷之1- 卷之11. 勸農局 1878.3  
原書名: British farming: a description of the mixed husbandry of Great Britain: being the article "agriculture" contributed to the "Encyclopaedia Britannica", ninth edition. Edinburgh: Adam and Charles Black, 1862.
- ③ヘヌリー・ステフェン (Stephens, Henry, 1795-1874) 著 『斯氏農書』. 岡田好樹譯 (1-49); 岡田好樹閱、明石春作譯 (50-64). 内務省勸業寮 (巻50?-64: 農商務省寮) 明治8年 (1-49); 明治15-17年 (50?-64). 64冊 26cm.  
原書名: Stephen's Work on Agriculture.
- ④ジェルリンエム, デビ (原綴不詳) 著 吉田五十穂譯 岡田好樹閱 『甜菜砂糖製造法』. 東京 穴山篤太郎. [出版年不明] 和装6冊 23cm 勸業寮藏版  
原書名: On the manufacture of sugar from beet-root.
- ⑤『訂正斯氏農書』. 岡田好樹譯 (巻1-49); 明石春作譯, 岡田好樹校閲 (巻50-64). 東京 甘泉堂; 有隣堂. 明治19.11-20.6. 洋装4冊 20cm.
- ⑥『牧羊計算』 岡田好樹譯 (原本所蔵不明)  
本書の存在は内閣書記局『諸官廳譯書目録』明治22年10月出版(『日本書籍分類総目録』(1) p.671) の記述による。
- ⑦「宿金泉樓」 福住正兄編 『箱根草』5集 (萬翠樓 1882刊 和装 木版) 所収 (写真5)

#### 4. 『官許佛和辭典』<sup>42)</sup> について

##### (1) 書誌

書誌を NACSIS-Cat に準拠して内容に忠実に記述すると次のようになる。

官許佛和辭典 = Nouveau dictionnaire français-

japonais / 好樹堂 [訳編].

長崎: [出版社不明]; Changhai: La Mission Presbytérienne Américaine (印刷), 1871.1. 440p; 25cm

上海1871年2月付けのフランス語で書かれた訳者岡田好樹の序文によると、この辞典はトマス・ヌジャン (Thomas Nugent, 1770?-1772) による、ポケット版の仏英辞典の30版を翻訳したものである。原著は、*Nugent's pocket dictionary of the French and English languages; in two parts: I. French and English.--II. English and French. Containing the following additions and improvements* ... 30th ed. London, Longman, 1862. であろう。初版は、ESTC (English Short Title Catalogue)<sup>43)</sup> で検索した限りでは、*A new pocket dictionary of the French and English languages. In two parts. I. French and English. II. English and French* ... London: printed for Edward and Charles Dilly, in the Poultry, MDCCLXVII. [1767] である。2版は同じ出版社から1774年に出版されている。英国図書館と米国議会図書館の蔵書目録<sup>44)</sup> 及びそれぞれのオンライン目録<sup>45)</sup>、及び NACSIS Webcat を検索する限り、すべての版が網羅されていないので確認できないが<sup>46)</sup>、18版あたりから、タイトルが *Nugent's pocket dictionary* ... と変わっている。T. Nugent の生前に出版されたのは初版のみで、2版から9版までは J. S. Charrier が、10版から19版までは J. Ouiseau が、24版～30版は J. C. Tarver というように改訂者が変わっている。

さらにこの序文には、原著21版へのはしがき (Advertisement) が掲載されている。石川県立図書館所蔵の第30版を見ると、5頁にわたって21版へのはしがきが英語で書かれており、その冒頭部分をフランス語に訳したものである。このフランス語の序文中、ヌジャンのことを、M. Nugent と書かれているため、日本の多くの文献で、M をヌジャンのファーストネームの頭文字のように書いているが、これは、英語の Mr. に相当するフランス語の Monsieur の略語であることに気づかなかったからであろう。

『官許佛和辭典』は約25000語を収録しており、頁数は440頁、大きさは25cm、本文の体裁は、仏語は横書き、日本語は漢字とカタカナによる縦

書きであるが、日本で初めての洋装本の仏和辞典である。武藤文庫（長崎大学）の『官許佛和辞典』には乱丁がある<sup>47)</sup> ようであるが、本学所蔵本にはない。岐阜大学所蔵本には、見返しに印があって、横浜の丸屋善八等で12両で販売されていたことがわかる。これは、同じ上海の美華書館で明治2年に2000部印刷された『改正増補和訳英辞書』（通称薩摩辞書）と同じ価格である。何部印刷されたかは不明である。Annual report of the Presbyterian Mission Press at Shanghai 1871 が存在すれば記述されているはずであるが、その存在が現時点では不明である。

印刷は、上海にある米国長老教会の印刷・出版所で行われた。標題紙には“IMPRIMERIE DE LA MISSION PRESBYTERIENNE”と記載されているが、英語では American Presbyterian Mission Press, 日本語（中国語）では「美華書館」あるいは「美華書院」という。この美華書館はフルベッキが1863年にガンブル（William Gamble, 1830-1886）を訪ねて、日本語の活字を用意しており<sup>48)</sup>、『改正増補和訳英辞書』のほかにもヘボン編訳『和英語林集成』（1867）、前田正毅、高橋良昭編『大正増補和訳英辞林』（1871）、島田胤則、額川泰清編輯『和英通語捷徑』（1872）、薩摩学生松田為常ほか編『独和字典』（1873）などがここで印刷されている。『改正増補和訳英辞書』の出版を最初に計画した高橋新吉は美華書館をフルベッキから紹介され、上海に密航してガンブルと契約を結んでいる<sup>49)</sup>。岡田好樹がどのような経緯で美華書館で印刷することになったのか記述したものはみつからなかったが、ガンブルは明治2年に上海から長崎に立ち寄ってアメリカに帰国しており、フルベッキも同年上京してしまう。フルベッキとの関係から岡田は美華書館で印刷できることを知っていたことは推測できるが、経緯がどうであったのかよくわからない。

30版以降にロンドンで出版されたものには版表示がないが、“by Brown and Martin ; with additions by J. Duhamel”の著者表示があり、1897年刊と1918年刊が存在しているようだ。インターネットのwebcatと全国の県立図書館のOPACを検索する限りでは、日本国内には24版が東京大学に、30版が石川県立図書館にそれぞれ1冊しかない。岡田好樹が実際に使ったものはどこにあ

るのか確認できていない。

## (2) 日本仏学史上の地位

『官許佛和辞典』について、「はじめに」で言及した島岡眞も紹介している『スタンダード仏和辞典』（大修館書店 1957年刊）<sup>50)</sup>の鈴木信太郎の序文を再度そのまま引用する。

日本で初めてフランス語を修めた学者は、村上英俊（1811-1892）であらう。（中略）1864（元治元）年に「佛語明要」四冊（「明要附録」一冊明治三年）を刊行した。木版和装本で、版下は英俊自身が驚ペンを削って書いたのであった。ABC順による最初の佛和辞典で、今から僅か93年前の著作である。

其後七年、1871（明治4）年に、崎陽（長崎）好樹堂訳「佛和辞典」Nouveau Dictionnaire français-japonais が、上海の米国長老教会印行で発兌された。これは、M.Nugent 著の小型仏英辞典の翻訳であるが、内容体裁ともに「仏語明要」よりも遙かに進歩してゐた。印刷は活字を使用し洋装の本に仕立てたが、まだ日本語を横組みにする工夫には気が附かかった。



写真4 高橋泰山訂正『佛和辞典』筆者所蔵

『佛語明要』は研究論文もあり、よく言及されているが、『官許佛和辞典』は、辞書史、印刷史、訳語史関連の著作物では取り上げられているものの、その評価については明確に述べられていない。『幕末明治初期フランス学の研究』や『日仏文化交流史の研究：日本の近代化とフランス』（参考文献 28 及び 35）では取り扱われていない。なぜだろうか。惣郷正明は『官許佛和辞典』の訳語を調べ、2. 岡田好樹の履歴の(1)長崎時代で触れた、岡田が上海にいたことの根拠ともなる事実として、『和譯英辞書』（明治2年刊）と『大正増補和譯英辞林』（明治4年10月刊）の両方の日本語が存在することを確認し、「八ヶ月も前であるが同じ美華書院で印刷したので校正刷を見る便宜があったからと思われる」<sup>51)</sup>と書いている。また、後に次のように述べている。「フランス語見出しに対する英語訳を、『和譯英辞書』によって日本語に変えたものが多い。編者の好樹は長崎の英学者である。『和譯英辞書』は『英和対譯袖珍辞書』の踏襲であり、その訳語は長崎でズーフがハルマの『蘭仏辞書』によって日本訳にしたものであるから、巡り巡って本家帰りをしたといえよう。これで村上英俊の『仏語明要』につぐ第二番目の仏和辞書が登場した。刊行を急いだためか、これにはルビ活字を使っていない。」<sup>52)</sup>このことから、岡田好樹の独自性があまりないようにみえる。一方、島屋政一は根拠は述べていないが、「スウジャンの佛英辞典を基礎とし、官許佛和辞典が上海の米國傳道協會より発行されて、佛語學者に非常の便宜を與へた。」<sup>53)</sup>と書いている。

『官許佛和辞典』が発行された後、一般的な仏和辞典としては、1886年発行の高橋泰山訂正『佛

和辞典』（有則軒・東崖堂、写真4参照）及び中村秀穂編訳『佛和辞書』（同盟出版）まで出版されていないが、これら2点とも岡田の辞書と同様、仏英辞典の英語部分を訳したものである。この時代の仏和辞書の訳語の比較については惣郷正明と田中貞夫が書いているが、田中は特にコメントしていない<sup>54)</sup>。惣郷は『官許佛和辞典』と高橋泰山訂正『佛和辞典』を比較して、「（前略）明治四年版のフランス文序文もそのままのせ、内容もまったく同じで、ただ本を小型B6版六三七ページに「訂正」しただけであった。」<sup>55)</sup>と書いているが、「内容も全く同じで」というのは違っている。確かに岡田の辞典の序文はそのままであるし、日本語の組み方も同じである。即ち、横組みであるのに日本語は倒して生まれ、縦書きとして読むようになっている。しかし、筆者が独自に幕末以前には日本語になかったような語彙を少し選んで比較してみると、表3のようになった。全く同じ訳語もあるが、異なるものも少なからずあり、*dieu* や *société* に少しずつ進化がみられる。

とはいえ、全体からみるとそのままの訳語が大半を占めることや、原語の読み方や発音が記載されていないのは『官許佛和辞典』のままである。

また、中江兆民が関与した2つの辞典、1887年刊『佛和辞林』（野村泰亨[等]編訳）や1893年刊『佛和字彙』（中江篤介、野村泰亨共訳）も外国の辞書の翻訳である。日本独自の仏和辞典が出現するのは1901年の『仏和新辞典』（野村泰亨、中沢文三郎著）を待つことになる。

以上のようなわけであるので、『官許佛和辞典』刊行後の15年間、『佛語明要』か『官許佛和辞典』しかなかった時代に『官許佛和辞典』は、今まで

(表3) 『官許佛和辞典』と訂正版の訳語比較

フランス語	『官許佛和辞典』	高橋泰山訂正『佛和辞典』
civilité	丁寧ナル。行儀ヨキ	丁寧ナルヲ、行儀ヨキヲ
dieu	天神、上帝	天帝、神
droit	権義。律令。願望。借り受ケ領地。租税。公平。特権	権利、律令、願望、借り受け領地、租税、公平、特権
idéal	想像ノ	想像ノ
individuel	分離シ難キ。独立ノ。単ノ	分離シ難キ、独立ノ、単ノ、各人ノ
liberté	自由。容易	自由、容易
société	仲ケ間。社中。交リ	舎会、仲ケ間、社中、交リ



わかっている以上に活躍しているはずである。『官許佛和辞典』は、国内に40冊以上の所在がわかっており、その蔵書印から開成学校、東京文理科大学、岐阜師範学校などいくつかの教育機関が所蔵していたことがわかる。また、岡田峻は『明日へのエスパニア語』で、西園寺公望がフランスへ留学したときに携帯したと書いている<sup>56)</sup>。しかし、西園寺のフランス行きは、明治3年12月3日に横浜から出航しており<sup>57)</sup>、これは新暦では1871年1月23日であり、『官許佛和辞典』の仏文の序文の日付、1871年2月が旧暦であればもちろん、新暦であってもその可能性は微妙なところである。長崎に慶應元年10月から3年まで長崎に滞在し、済美館でフランス語を学んだとされる中江兆民は、明治4年11月（新暦では同年12月）にアメリカ経由でフランス留学しており、『官許佛和辞典』を携帯した可能性は高い。明治の前半に渡仏した日本人からの言及がもっとあってもよいのではないか。

## 5. まとめと今後の課題

岡田家と連絡ができたことにより、過去に活字になった図書や論文には記述されていない岡田好樹の生没年等が明らかになった。その他岡田好樹についてわかったことは、ほぼここまで述べてきたとおりである。公文書等から岡田好樹の経歴等をまとめたが、岡田峻が『明日へのエスパニア語』

で述べているいくつかの事<sup>58)</sup>、即ち、岡田好樹が19歳のときに語学研究のために外遊したこと、大学南校で英語を教えたこと、西園寺公望などフランス留学者が『官許佛和辞典』を携帯したこと、伊東己代治が好樹の書生だったと言っていることは、文献等から確認することができなかった。ただ、漢詩を詠んでいたことについては、たった一編ではあるが『箱根草』に岡田好樹の漢詩が掲載されているのを確認することができた。当時の同人誌を丹念にさがせばまだみつかるかもしれない。また、岡田峻の絶版になっている著作『言葉と文化』（三笠書房 戦後発行）<sup>59)</sup>の存在がわからず、これも確認する必要がある。

岡田好樹がどのように英語を学んだかということは、長崎の英語所で学んだらしいということが東京大学新聞研究所所蔵の何礼之の未刊行の日記「公私日録」の記述から推測できたが、それ以上のことは不明である。岡田好樹と何礼之の交流について無視できない事実がある。長崎時代、慶應元年に済美館で何礼之と一緒に英語を教え<sup>60)</sup>、明治9年から17年までは内務省で一緒に勤務しており、しかも明治11年からは同じ図書館で、職員録には名前が並んで掲載されている<sup>61)</sup>。その間に『箱根草』に並んで漢詩を載せている（写真5参照）。さらに明治31年にはフルベッキ先生記念金募集主意書の発起人に名を連ねている。未刊行何礼之の日記「公私日録」「日新日録」等

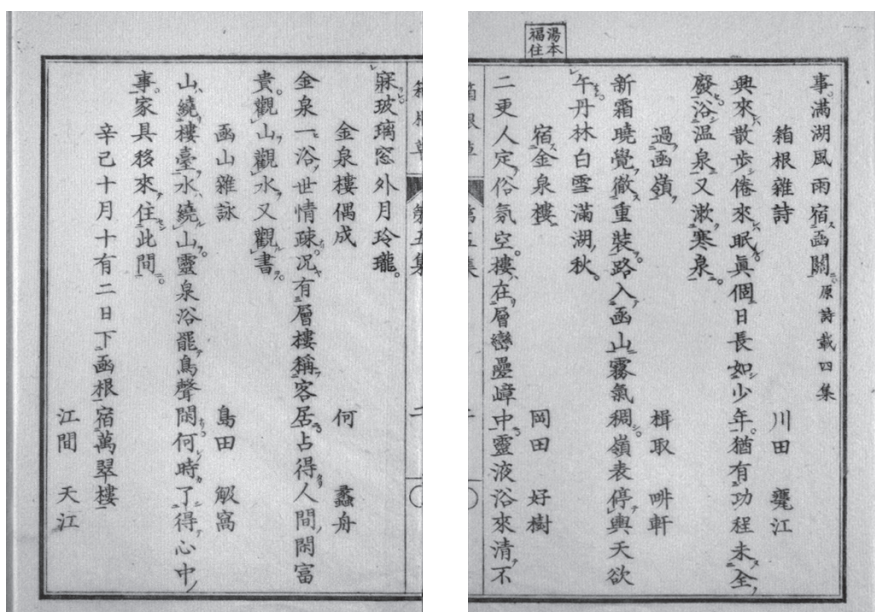


写真5 『箱根草』 5集 2丁 名古屋大学附属図書館所蔵

は大部なものであるため、現時点では調査しきれないが、これを丹念に調査する必要がある。内務省を退官してからの岡田好樹の動向についてもわかるかもしれない。

どういういきさつで『官許佛和辞典』を翻訳することになったかについても、確信を得ることができなかった。松藤英恵は、「明治政府側の外交的な必要性もあって、取り敢えずは英語文献翻訳できこえた岡田好樹に、英語から翻訳可能なニュジャン小事典翻訳の白羽の矢が立ったとも考えられるのである。」<sup>62)</sup>と推測しているが、その根拠となる明治政府との関係は記述されていない。「好樹堂」という名称も『官許佛和辞典』に見られるのみで、その由来等は不明である。『日本国語大辞典』第2版(小学館 2000-2002)では「堂」は「屋号・雅号、または建造物の名前などに添えて用いる。」とあるので、単に自分の名前に「堂」をつけただけかもしれない。

フルベッキとの交流は、上述したように長崎で最低2回一緒に写真に撮っていることや、上海美華書館で『官許佛和辞典』を印刷したことから、『官許佛和辞典』を翻訳するにあたっては、フルベッキの助言があったと考えられる。さらに、外務省時代のところで書かなかったが、フルベッキはニューヨーク市内のフェリスに宛てた1872年6月22日付け(旧暦では5月17日)の手紙で岡田を紹介している。姓しか書いていないが高谷道男の訳によれば、「伊藤、大久保、及び寺島の諸卿とともにわたしの生徒が何人かが随行しました。とくにその中の岡田にお会いください。」とある<sup>63)</sup>。日付に矛盾はないし、寺島らに随行した人物ということで、まず岡田好樹と判断してよいと思う。また前述したようにフルベッキ先生記念金募集主意書の発起人ともなっているので、これらのことから岡田好樹とフルベッキとは深い交流があったことが推測される。

一方、岡田好樹は、前述したように大隈重信に宛てた書簡が4通残っている<sup>64)</sup>。大隈が、外国官副知事と会計官副知事兼任時代のものが1通、大蔵大輔時代のものが2通、太政官参議になってからが1通であるが、宛名は大隈先生貴下、夫子貴下となっている。いずれの書簡にも『官許佛和辞典』上梓についての内容が含まれている。最初の1通は明治3年6月13日付けのもので、上

京した折りに大隈に世話になったことや広運館の経費に関する内容で、本文の後、『官許佛和辞典』上梓について恩典を願っている。また、2通目には、『官許佛和辞典』出版のため、長崎県庁から辞典の草稿と原本を提出した旨(明治3年7月21日付け)が書かれている。このことを裏付ける事実として、長崎県が大隈民部大輔宛に、仏和辞典の原稿料下付を請う文書(明治3年7月3日付け 大隈は同年7月から民部大輔との兼任を解かれ、大蔵大輔専任となっている)がある。この文面は早稲田大学図書館がオンライン上で提供している「早稲田大学古典籍総合データベース 大隈重信関係資料」に含まれている<sup>65)</sup>。図書を出版する際は、管轄府県庁を通じて行政官に届け出て官許を得なければならないという明治2年の出版条例(明治3年2月22日改定では、所管部署は大史局となり、以後たびたび変更される)と関連があると考えられる。また、『大隈重信関係文書』には、加藤弘之(当時大学大丞)から大隈重信(当時大蔵大輔)に宛てた書翰が収められており、その中に、岡田が仏和辞書を印刷するための代金六千両の支払いを依頼するものが2通ある<sup>66)</sup>。上海美華書館で印刷するために六千両が必要だったことは、幕末明治初年の印刷史上、意味のある数字となろう。また手紙の日付が明治3(1870)年8月24日と25日であることから、岡田が大隈に『官許佛和辞典』の上梓について懇願した書翰を書いた一か月後のことであり、加藤と岡田の関係を調べることによって、『官許佛和辞典』の出版経緯がわかるかもしれない。

#### <注>

- 1) 名古屋大学史編集委員会編. 名古屋大学五十年史. 部局史2. 名古屋, 名古屋大学, 1989, p.600
- 2) 島岡眞. 好樹堂訳『官許佛和辞典』の目録から. 館燈: 名古屋大学附属図書館館報. No.30, 1975.8.15, p.270-271
- 3) 惣郷正明著. 辞書風物誌. 東京, 朝日新聞社, 1973, p.227
- 4) 古賀十二郎; 長崎学会編. 長崎洋学史. 上巻. 長崎, 長崎文献社, 1966, p.200
- 5) 柴田昌吉(1841-1901)は長崎出身の通詞。子安峻と共著で『附音挿圖英和字彙』(日暹社 1873)を著した。済美館では岡田好樹とともに英語を教えた。伝記に、岩崎克己著『柴田昌吉傳』(一誠堂書店発売 1935)がある。
- 6) 園田尚弘, 若木太一編. 辞書遊歩: 長崎で辞書を読む. 博多, 九州大学出版会, 2004, p.125 (ISBN

- 4-87378-836-6)
- 7) 田中梅吉. 日獨言語文化交流史大年表:総合詳説. 東京, 三修社, 1968, p.552
  - 8) 表1中, 何礼之の「公私日録」はマイクロ資料を東京大学新聞研究所が所蔵, 「戊辰六月改分限帳」『明治元年版長崎府職員録』『改正長崎職員録』『廣運館医学校生徒入門書類雑書(雞肋)』は長崎歴史文化博物館蔵。慶応4年4月改分限帳は, 越中哲也「長崎と英語」『純心英米文化研究』2 純心女子短期大学英米文化科1984 p.28 で言及されている。写本は長崎歴史文化博物館所蔵。
  - 9) 大谷利彦 [著]. 続長崎南蛮余情: 永見徳太郎の生涯. 長崎, 長崎文献社, 1990, p.372, 374, 465. また, 曾宮は, 岡田好樹の三男秀に東京美術学校時代に世話になったことを, 曾宮一念著『夕ばえ』(石原求龍堂 1943) の p.272-273 に書いている。岡田秀は, 号を秋嶺といい, 明治・大正期の日本画家で, 1901年から1920年まで東京美術学校の教員となり, 著書に『毛筆畫手本教授書:尋常科』(日本書籍 1905)や『最近圖法教科書』(東京興文社 1911)がある。
  - 10) 富田仁著. 長崎フランス物語. 東京, 白水社, 1987, p.77
  - 11) 長崎教育会編. 長崎縣人物傳. 京都, 臨川書店, 1973, 1008, 151, 46p. (『大禮記念長崎縣人物傳』1919年刊の復刻)
  - 12) Verbeck, Guido Fridolin [著]; 高谷道男編訳. フルベッキ書簡集. 東京, 新教出版社, 1978, p.144
  - 13) 写真の開祖上野彦馬: 写真にみる幕末・明治. 東京, 産業能率短期大学出版部, 1975, p.30
  - 14) 『フルベッキ書簡集』前掲注12 p.142
  - 15) 『写真の開祖上野彦馬: 写真にみる幕末・明治』前掲注13 p.209
  - 16) “教育の原点を考える”で紹介されている高橋信一(慶応大学准教授)による“「フルベッキ写真」に関する調査結果”. (オンライン), 入手先< [http://pro.cocolog-tcom.com/edu/2007/01/post\\_1dcc.html](http://pro.cocolog-tcom.com/edu/2007/01/post_1dcc.html) > (参照 2007-12-24)
  - 17) 『長崎縣人物傳』前掲注11 p.858
  - 18) 開かれた窓: 写真誕生の170年: 東京富士美術館コレクション. 八王子, 東京富士美術館, 2004, p.211
  - 19) “「フルベッキ写真」に関する調査結果”前掲注16
  - 20) 岩崎克己著. 柴田昌吉傳. 東京, 岩崎克己:一誠堂書店(發賣), 1935, p.28
  - 21) 倉沢剛著. 直轄学校政策. 東京, 吉川弘文館, 1983, p.557. (幕末教育史の研究, 1)
  - 22) 岡田峻著. 明日へのエスパニア語. 東京, 三省堂, 1942, p.8
  - 23) 早稲田大学大学史資料センター編. 大隈重信関係文書. 3. 東京, みすず書房, 2006. p.101 (ISBN 4-622-08203-9)
  - 24) 同上 p.100-101
  - 25) “校訂明治官員録(10月5日改め)”. 新人物往来社, 1986, p.51 (日本史総覧, 補巻3)
  - 26) 外務省編. 日本外交文書. 第5巻. 限定版. 日本外交文書頒布會, 1954, p.1
  - 27) 同上 p.5
  - 28) 犬塚孝明著. 寺島宗則. 東京, 吉川弘文館, 1990, p.177-178 (人物叢書)
  - 29) 『明日へのエスパニア語』前掲注23 p.9
  - 30) 『袖珍官員録』『明治初期の官員録・職員録』寺岡書洞 1976 (明治初期歴史文献資料集 第1集 明治初期の官員録・職員録 第2巻 p.140 所収)
  - 31) 成島柳北. “航西日乗”. 東京, 筑摩書房, 1969, p.140 (明治文学全集, 第4巻)
  - 32) 国立公文書館編. 公文録目録. 第2. 東京, 国立公文書館, 1978, p.238
  - 33) 印刷局編. 勅奏官一覧表 明治6年11月15日印刷. 東京, 印刷局, 1873
  - 34) 『掌中官員録』『勅奏官職員録』『官員録』『内務省職員録』『明治官員録』の書誌  
『掌中官員録』『官員録』『明治官員録』: 寺岡書洞 1976 (明治初期歴史文献資料集 第1集 明治初期の官員録・職員録 第2巻 所収)  
『勅奏官職員録 8年3月改』[出版者不明] 1875  
『内務省職員録』日本図書センター 1990 (内務省人事総覧 第1巻 所収)  
『改正官員録』彦根正三編 博公書院 1883
  - 35) 獨協学園百年史編纂委員会編. 獨逸學園史. 資料集成. 草加市, 獨協学園, 2000, p.260
  - 36) 1997年8月14日に総理府賞勲局に問い合わせた際の回答文書(総賞第405号)による。
  - 37) 大橋昭夫, 平野日出雄 [著]. 明治維新とあるお雇い外国人: フルベッキの生涯. 東京, 新人物往来社, 1988. p.368-369. 発起人の中には, 加藤弘之, 高橋是清, 副島種臣, 何礼之, 前島密ら錚々たる人物の名が見える。
  - 38) 『明日へのエスパニア語』前掲注23 p.9
  - 39) 長崎市編. 長崎市史. 風俗編. 長崎市, 1925. 「参考史料目録」 p.3 談話者一覧
  - 40) 古賀十二郎著. 徳川時代に於ける長崎の英語研究. 福岡, 九州書房, 1947, p.88. 同様の記述が古賀十二郎著『長崎洋学史』上巻(長崎文献社 1966) p.120 にもある。岡田好樹から, 松本圭三郎について話を直接聞いたもの。
  - 41) 大谷利彦 [著]. 続長崎南蛮余情: 永見徳太郎の生涯. 長崎, 長崎文献社, 1990, p.374. (ISBN 4-88851-055-5)
  - 42) 国立国会図書館近代デジタルライブラリーに全文が掲載されている。< <http://kindai.ndl.go.jp/BIBibDetail.php> >, (参照 2007-12-24)
  - 43) 主としてイギリスと北米で1473~1800年に印刷された, 主に英語で書かれた図書の目録。< [http://estc.bl.uk/F/?func=file&file\\_name=login-bl-list](http://estc.bl.uk/F/?func=file&file_name=login-bl-list) >, (accessed 2007-10-19)
  - 44) それぞれ参照した書誌は, *General catalogue of printed*



- books : photolithographic edition to 1955. 163. London, Trustees of the British Museum, 1963. 及び *The National union catalog, pre-1956 imprints*. 424. London, Mansell, 1975.
- 45) British Library Integrated Catalogue, 及び Library of Congress Online Catalog. < <http://catalog.loc.gov/cgi-bin/Pwebrecon.cgi?DB=local&PAGE=First> >, (accessed 2007-10-19)
- 46) 30 版までで、8 版、15～17 版、20～23 版、25～26 版及び 28～29 版の所蔵が明らかでない。
- 47) 園田尚弘, 若木太一編. 辞書遊歩: 長崎で辞書を読む. 福岡, 九州大学出版会, 2004, p.158. (ISBN 4-87378-836-6)
- 48) Verbeck, Guido Fridolin [著]; 高谷道男編訳. フルベッキ書簡集. 東京, 新教出版社 1978. p.80
- 49) 石井研堂. 明治事物起原. 4. 東京, 筑摩書房, 1997, p.374-375. (ちくま学芸文庫). (ISBN 4-480-08364-2)
- 50) 1975 年の増補改訂版にも 1957 年の初版の序文がそのまま掲載されている。
- 51) 惣郷正明. 岡田好樹訳仏和辞典 (ことばの散歩 3). 言語生活. No.363, 1982.3, p.47. 例として, *dura-mère* (英語では, *dura-mater*) が「脳ノ外膜」の訳 (解剖学の用語で硬膜) で掲載されていることを紹介している。確かに『和譯英辞書』には *dura-mère* の項目は存在しない。
- 52) 惣郷正明. 洋語辞書事始. 東京, 日本古書通信社, 1986, p.80-82 (こつう豆本 72)
- 53) 島屋政一著. 印刷文明史. 第 4 卷. 東京, 印刷文明史刊行會, 1934, p.2262. スウジャンとあるのはヌウジャンの印刷ミスであろう。
- 54) 田中貞夫. 仏和辞書 (幕末明治期) における訳語の変遷. 一般教育部論集 創価大学総合文化部. No.28, 2004.2, p.1-14
- 55) 惣郷正明著. 洋学の系譜: 江戸から明治へ. 東京, 研究社出版, 1984, p.243 (ISBN 4-327-37625-6)
- 56) 『明日へのエスパニア語』 前掲注 23 p.10
- 57) 立命館大学編. 西園寺公望伝. 第 1 卷. 東京, 岩波書店, 1990, p.206 (ISBN 4-00-008791-6)
- 58) 『明日へのエスパニア語』 前掲注 23 p.8-10
- 59) 岡田峻著. スペイン語大全. 東京, 北星堂, 1957. 著者略歴で紹介
- 60) 『長崎洋学史』 上巻 前掲注 4 p.200
- 61) 『内務省人事総覧』 第 1 卷 (日本図書センター 1990) 所収の「勅奏官一覧表」(明治 7 年 2 月 15 日印刷) 及び「内務省職員録」(明治 9 年 7 月 5 日改正～明治 17 年 8 月 15 日改正) による。
- 62) 『辞書遊歩: 長崎で辞書を読む』 前掲注 6 p.126
- 63) 『フルベッキ書簡集』 前掲注 12 p.210. 村瀬寿代訳編『日本のフルベッキ』(洋学堂書店 2003) の p.250 では、「オカダ博士」と訳されている。また, グリフィスの *Verbeck of Japan*. New York, Fleming H.Revell, c1900. p.257 には, Dr.Okada とある。もし, 岡田好樹が長崎歴史文化博物館所蔵の写真の説明書にあるように, 医師であるのであれば, Dr. でもおかしくはない。

- 64) 『大隈重信関係文書』 前掲注 24 p.101
- 65) 早稲田大学図書館. “早稲田大学古典籍総合データベース 大隈重信関係資料”. (オンライン), 入手先, < <http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/search.php?cndbn=%95%A7%98a%8E%AB%93T&szlmt=30> >, (参照 2008-01-30)
- 66) 『大隈重信関係文書』 前掲注 24 p.310 及び p.311

## 付記

この調査研究は、「はじめに」に書いたように島岡眞氏から調査依頼を受けて始めたものであるが、当初は豊岡文英氏(元名古屋大学経済学部図書室)と共同で調査にあたった。筆者がたまたまドイツ文字の調査をしており、偶然に田中梅吉著『日獨言語文化交流史大年表: 総合詳説』中に岡田好樹の孫に岡田峻がいることを発見した。岡田峻は既に亡くなっていたが、幸いなことに岡田峻には著作が数多くあり、『スペイン語常用動詞作文小辞典』改訂版(北星堂書店 1981)の改訂者、寿里順平氏と連絡をとり、岡田家の住所を教えていただき、東京の岡田家を訪問することができた。この調査の大きな飛躍となった寿里氏や岡田家との連絡の労をとったのが豊岡氏であった。論文発表を分担執筆すべく、論文の目次立てまで検討していたが、2006 年 2 月に急逝され、内容をかなり変更しての発表となった。ここにご冥福をお祈りする。

岡田好樹の写真及び曾宮一念との縁戚関係については、喜多芳明氏(元長崎大学医学分館専門員)に多大な情報をいただいた。また、多数の文献の取り寄せには名古屋大学附属図書館の相互利用掛にたいへんお世話になった。このほかにもお名前をあげられないくらい大勢の日本各地の大学図書館職員の方にお世話になった。この場を借りて御礼を申し上げる。

## 【参考文献】

- 1 Griffis, William Elliot [著]; 村瀬寿代 訳編. 新訳考証日本のフルベッキ: 無国籍の宣教師フルベッキの生涯. 佐賀, 洋学堂書店, 2003, ix, 467p, 図版 [4] p.
- 2 Griffis, William Elliot. *Verbeck of Japan : a citizen of no country*. New York, Fleming H.Revell, c1900, 376p.
- 3 Verbeck, Guido Fridolin [著]; 高谷道男編訳. フルベッキ書簡集. 東京, 新教出版社, 1978, 408, 31p.
- 4 池田哲郎著. 日本英学風土記. 東京, 篠崎書林, 1979, 704p.
- 5 犬塚孝明著. 寺島宗則. 新装版. 東京, 吉川弘文館, 1990, 14, 309p. (人物叢書). (ISBN 4-642051-93-7)
- 6 岩崎克己著. 柴田昌吉傳. 東京, 岩崎克己: 一誠堂書店(發賣), 1935, 109p, 図版 4 枚
- 7 岩堀行宏. 英和・和英辞典の誕生: 日欧言語文化交流史. 東京, 図書出版社, 1995, 332p. (Bibliophile series). (ISBN 4-809905-17-9)
- 8 上野彦馬 [撮影]; 馬場章, 上野彦馬歴史写真集成. 東京, 渡辺出版, 2006, 126p. (ISBN 4-902119-05-6)

- 9 越中哲也. 長崎と英語. 純心英米文化研究. 2, 純心女子短期大学英米文化科, 1984, p.17-31
- 10 大久保利謙. 幕末英学史における何礼之: とくに何礼之塾と鹿児島英学との交流. 鹿児島県立短期大学研究年報. Vol.6, 1978.3.25, p.41-6
- 11 大谷利彦 [著]. 続長崎南蛮余情: 永見徳太郎の生涯. 長崎, 長崎文献社, 1990, 467, 19p. (ISBN 4-888510-50-4)
- 12 大橋昭夫, 平野日出雄 [著]. 明治維新とあるお雇い外国人: フルベッキの生涯. 東京, 新人物往来社, 1988, 380p. (ISBN 4-404015-60-7)
- 13 岡田峻著. 明日へのエスパニア語. 東京, 三省堂, 1942, 286p.
- 14 堅田剛著. 独逸学協会と明治法制. 東京, 木鐸社, 1999, 314, iv p. (ISBN 4-8332-2282-5)
- 15 何礼之「公私日録」東京大学新聞研究所所蔵(未公開のマイクロ資料)
- 16 倉沢剛著. 直轄学校政策. 東京, 吉川弘文館, 1983, 760p. (幕末教育史の研究, 1)
- 17 倉沢剛著. 諸藩の教育政策. 東京, 吉川弘文館, 1986, 822p. (幕末教育史の研究, 3). (ISBN 4-642-03253-3)
- 18 古賀十二郎著; 長崎学会編. 長崎洋学史. 上巻. 長崎, 長崎文献社, 1966, 744p.
- 19 古賀十二郎著. 徳川時代に於ける長崎の英語研究. 福岡, 九州書房, 1947, 120p.
- 20 後藤和雄, 松本逸也, 早坂元興編. 読者所蔵「古い写真」館: 幕末から昭和へ. 東京, 朝日新聞社, 1986, 209p. (ISBN 4-022555-11-4)
- 21 島岡眞. 好樹堂訳『官許佛和辞典』の目録から. 館燈: 名古屋大学附属図書館館報, No.30, 1975.8.15, p.270-271
- 22 島屋政一著. 印刷文明史. 第4. 大阪, 印刷文明史刊行会, 1934, p.2129-2873
- 23 写真の開祖上野彦馬: 写真にみる幕末・明治. 東京, 産業能率短期大学出版部, 1975
- 24 惣郷正明著. 辞書風物誌. 東京, 朝日新聞社, 1973, 271p.
- 25 惣郷正明. 岡田好樹訳仏和辞典(ことばの散歩 3). 言語生活. No.363, 1982.3, p.47
- 26 惣郷正明著. 洋学の系譜: 江戸から明治へ. 東京, 研究社出版, 1984, 325p. (ISBN 4-327376-25-6)
- 27 惣郷正明著. 洋語辞書事始. 東京, 日本古書通信社, 1986, 93p. (こつう豆本, 72)
- 28 惣郷正明著. 目で見る明治の辞書. 東京, 辞典協会, 1989, 83p. (ISBN 4-915216-34-9)
- 29 祖田修 [著]. 前田正名. 新装版. 東京, 吉川弘文館. 1987, 13, 328p, 図版 [2] p. (人物叢書). (ISBN 4-642-05074-4)
- 30 園田尚弘, 若木太一編. 辞書遊歩: 長崎で辞書を読む. 福岡, 九州大学出版会, 2004, xii, 190p. (ISBN 4-87378-836-6)
- 31 田中梅吉著. 日獨言語文化交流史大年表: 総合詳説. 東京, 三修社, 1968, 694p. (ISBN 4-384-05818-7)
- 32 田中貞夫. 仏和辞書(幕末明治期)における訳語の変遷. 一般教育部論集. 創価大学総合文化部 No.28, 2004.2, p.1-14
- 33 田中貞夫著. 幕末明治初期フランス学の研究. 東京, 国書刊行会, 1988, 616, x p.
- 34 富田仁著. フランスとの出会い: 中江兆民とその時代. 東京, 三修社, 1981, 366, 27p. (ISBN 4-384-03714-7)
- 35 富田仁著. 長崎フランス物語. 東京, 白水社, 1987, 213p. (ISBN 4-560-02925-3)
- 36 内務省人事総覧. 第1巻. 東京, 日本図書センター, 1990, p.662. (ISBN 4-8205-3415-7)
- 37 中江兆民著; 松本三之介 [ほか] 編. 中江兆民全集, 第17巻, 東京, 岩波書店, 1986, 480p. (ISBN 4-00-090867-7)
- 38 長崎英語教育百年史刊行委員会 [編]. 長崎における英語教育百年史. 長崎, 長崎英語教育百年史刊行委員会, 1959, 70p.
- 39 長崎市立長崎商業百年史編集委員会編. 長崎商業百年史. 長崎, 長崎市立長崎商業高等学校, 1985, 713p.
- 40 西堀昭著. 日仏文化交流史の研究: 日本の近代化とフランス. 増訂版. 東京, 駿河台出版社, 1988, xvi, 876p. (ISBN 4-411-02036-X)
- 41 日本英学史学会編. 英語事始. 東京, エンサイクロペディア プリタニカ (ジャパン), 1976, 314p.
- 42 松本逸也. 幕末漂流. 東京, 人間と歴史社, 1993, 356p. (ISBN 4-89007-077-X)
- 43 宮沢真一. 解説: 主として日英文化交流史から見た「薩摩辞書」. 鹿児島, 高城書房出版, 1997, 26p. (和訳英辞書 別冊)
- 44 宮永孝著. 日本史のなかのフランス語: 幕末明治の日仏文化交流. 東京, 白水社, 1998, 277p. (ISBN 4-560-02810-9)
- 45 森永種夫校訂. 長崎幕末史料大成. 3-5 開国対策編 1-3. 長崎, 長崎文献社, 1970-1971, 3冊
- 46 立命館大学編. 西園寺公望伝. 第1巻. 東京, 岩波書店, 1990, 458p. (ISBN 4-00-008791-6)
- 47 早稲田大学大学史資料センター編. 大隈重信関係文書. 3. 東京, みすず書房, 2006, 314p. (ISBN 4-622-08203-9)
- 48 早稲田大学図書館. “早稲田大学古典籍総合データベース 大隈重信関係資料”. (オンライン), 入手先, <[http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/ga\\_okuma/index.html](http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/ga_okuma/index.html)>, (参照 2008-01-30)